



TITLE:

火星より無線電信傍把

AUTHOR(S):

---

CITATION:

火星より無線電信傍把. 天界 1921, 1(11): 224-224

ISSUE DATE:

1921-09-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/159616>

RIGHT:

Hクロイツ(一八九六一一九〇七)  
Hコホルト(一九〇七)

右の中、クリュゲル時代からはプロイセン國  
文部大臣の保護と天文協會(Astronomische  
Gesellschaft)の援助が加つて今日に及んで  
ゐる。大論文があれば、それはシュマルヘル  
代既に補欠號(Ergänzungshefte)を出した  
ことがあるけれど、其の後中絶したのを、後  
にクロイツ時代に至つて之れを復活した。コ  
ホルト時代になつて一九一三年文獻附錄(Li-  
tarische Beilagt)を別に發行し、近頃一九  
一九年夏以來、又、觀測報(Beobachtungs-  
Zirkulär)なるものをも發刊するに至つた。  
現在は第二百十四卷目を出してゐる。之れは  
今日、天文學上の専門雜誌として第一流のも  
ので、専門家は一刻も此の雜誌から眼を離す  
ことが出来ない。

## △△△ 火星無線電信傍把

(紐育合同通信一日發) マルコニー氏は快  
走船エレクトラ號に於て火星よりの無線電  
信を傍把せりマルコニー氏が火星より傍把  
せる無線電波の延長は既に世界にある最高  
威力の無線電信所のそれよりも大なりと。  
此の電報が各新聞に掲載されたのは  
去る九月六日であつた。しかし  
之れは大なる誤りである。火星は  
其の當時、地球から言へば太陽と

合の位置を過ぎたばかりで、吾々  
からの距離は七千萬里の遠方にあ  
る、若し火星に人類が居るならば、  
此の地球人類の騒ぎを笑つて。

『始めて天體相互通信に、御互ひがわざわ  
ざ遠く離れてゐる時機を撰ぶ馬鹿がある  
ものか。來年の春まで待てば、一千七百  
万里に近づく時があるぢやないか』

と言ふのでありませう。左に日下  
部博士の談があります。

### 東北大學の日下部博士談

新聞紙上で又も紐育發でマルコニー氏が火星  
からの電波を受けたとの通信が見えますが昨  
年一月頃と記憶して居ます既に昨年春火星か  
ら電波を受けたとしたならば

學術界では今日迄等閑にして居る譯がな  
いのにも又も宣傳したと云ふのは所謂例の米の  
宣傳主義でたしかにマルコニー會社の廣告的  
宣傳と云ふも過言ではありませう  
世界の無線電信より一層強い電波を感じたら  
どんな悪い機械でも感じなければならぬそ  
れを尤も弱い電波を感じたと云ふならマルコ  
ニー氏の發明の機械の良い事がわかるが強い  
電波であつたと云ふから

原の町の無線電信所にも感じなければならぬ  
殊に歐洲諸國の各地の無線電信所では感  
じたと云ふ事を報導して居ない唯マルコニー  
氏の快走船で感じたと云ふ事は實にあやし

です如何にして火星と云ふ事が確信され様か  
第一太陽からは種々の現象で極光や磁氣あら  
しを現出するので常に發電し地球上に色々  
影響して居る事は今喋々する迄もないがその  
太陽からの電波につき研究もせず否定も  
せず火星からの推定はマルコニー氏の發  
言さと思はれない電波も光線と同じ事で發電  
體に近ければ強く遠ざかれば弱くなるのは距  
離の自乗に逆比例するでマルコニー氏の快  
走船附近空中からの發電にても機械に作用し  
たものに非ざるか若し火星からの通信なら一  
回に限らず日に何回も限りなく電波を送り各  
所の機械に同時刻に感じなければならぬ電波  
の地球を通過するには一秒時間の何十分の一  
と云ふ時間で先づ時間がないと云つてよい我  
々が夜

宮城野原に行き鈴虫の聲を聞いてもそれ  
は前後左右何れよりの聲であつたかは一聲や  
二聲ではとても方向などわかり様もないそれ  
に無線電信機械と云ふのはその耳以下である  
から方向などわかる様がなく夫で火星など  
早我點するの愚も甚だしい事と思ひます要す  
るに去る一日に感じたものが今日未だ學界に  
噂になつてない事を見ると昨年春のと同様に  
世界に向つてマルコニー會社の存在と機械の  
發賣方につきての一種の考案した世界の廣告  
の宣傳です若もたしかに感じたものであつた  
なら我々の

大に研究すべき事柄だが今日の場合一種  
の新聞的電文であらうと思ひます云々

(新東北、九月八日)